捕獲位置情報等の活用方法

講師：一般財団法人自然環境研究センター 川本朋慶

捕獲を含む位置情報は、野生動物の管理において重要な役割を果たします。確認情報（目撃情報やロードキルなど）、捕獲情報（狩猟や指定管理事業による捕獲）、モニタリング情報（糞粒法、糞塊法、区画法など）があり、これらを地図上で見ることで、いつどこでどのような情報があるかがわかりやすくなります。情報が細かいほど活用方法は多岐にわたりますが、細かい情報を収集するにはコストがかかります。

位置情報活用の目的は、現状の把握、保護・管理への活用、被害防除対策への活用、普及啓発への活用などがあります。例えば、5km メッシュはハンターマップでも使用されており、低コストで位置情報を収集できます。出猟カレンダーの情報があれば、比較的簡単に作成できます。

保護・管理への活用では、生息密度や個体数が細かい空間単位で推定されるため、具体的な施策につなげやすいですが、位置情報が細かいためコストがかかります。また、複数のモニタリングを行っている分、コストがかかります。

被害防除対策への活用事例としていくつかの自治体での事例を紹介します。アライグマの場合、月ごとの捕獲傾向や捕獲場所を市町村へフィードバックすることで、具体的に捕獲強化できる時期や場所を示すこともできます。

位置情報データ取得時の注意点としては、空間的に偏ってデータを収集すると誤差が大きくなることが挙げられます。調査地点数やデータ数が少なくなると誤差が大きくなる可能性が増え、気象条件や調査者の熟練度など様々な要因によっても誤差は大きくなるため、これらを踏まえて位置情報を精査することが重要です。